

何の為に剣を振るうか

虹眼の代替竜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつの間に遊戯王GXの世界線にいた。

特に主人公気質なわけでもなく、打たれ強いわけでもない。

良くも悪くも普通の少年。

舞台は基本的にデュエルアカデミア

学年は遊城十代と同じ

ヒロイン未定

別作品キャラ登場（パラレル設定）

目次

#01	上陸	1
#02	5年振りの対戦（前）	6
#03	5年振りの対戦（後）	14
#04	戦いの後	21
#05	同類の痛み	25
#06	明日香の強さ（前）	32
#07	明日香の強さ（後）	38
#08	夕食とその後の明日香	45

#01 上陸

——あんなヤツほっとこうぜ。

何を間違えてしまったんだろうか。

——うわ、あいつこっち見てね？

僕の周りには、誰もいなくなった。

——まだガツコ来てんのかよ。

そして、周りから否定されるようになった。

——気持ち悪い。

ああ、そうだな。

とても——キモチワルイ。



何時間も揺られた憎き船（にづく）を降り、安定した陸地に足を着けた。

（ああ、足元が安定してるって素晴らしい）

まだ揺れているような感覚が残っているが、視覚的には確かに上陸している。

肩を回したりして身体をほぐしていると、校舎がある方向から白と

青のカラーリングというなかなか派手な制服を着た男子生徒がこちらに近寄ってきた。

「久しぶりだな」

「ああ、丸藤先輩まるふじでしたか。お久しぶりです」

「……あれから5年経ったが、その、調子はどうだ？」

僕の知る限りではいつも毅然とした態度をとっている丸藤先輩が言い淀んでいる様子は、なんとも奇妙な感じがした。

「ここ1年はだいたい調子が良いです。というかデュエルアカデミアに入学したんですから今更ですよ」

僕は苦笑しながらそう答える。

「そういえばそうだな。まあ、なんだ。歓迎するぞ、後輩」

「はい、またよろしくお願いします」

再び一緒の学校に通うことになった丸藤亮りょう先輩に歓迎され、僕の2度目の高校生活は始まった。

とどのつまり、僕は俗に言う『転生者』だ。
と言ってもトラックに轢かれて死んだら神様に会ったとかではない。

20歳を過ぎ大学生でいられるのもあと1年くらいかあ、と友人と話しながら遊戯王カードで対戦して遊んだ帰り道、急に意識が遠のいて気づいた時には小さな子供になっていた。

初めはパニックになり、子供ゆえに緩い涙腺から大粒の涙を流しながら泣いてしまった。すると両親らしき男女、というか昔の僕の両親そのままがやって来た。

あれ、別人になったんじゃないやなくてタイムリープ系？

予想外の状況からの更に予想外な出来事で、一周回って落ち着い

た。

きよとんとしている僕を見て『昼寝をして怖い夢でも見たのだから』と両親は思ったらしく、

「よし、じゃあ響也きょうやが好きなビデオ観ようか！」

「そうね、今日は特別に夕ご飯までずっと観てていいわよ！」

と、あやしてきた。

僕はなんとも言えない申し訳ない気持ちになったけど、とりあえず今は落ち着く時間と情報が欲しいので「うん」と答えた。

父がテレビの方へ行き、いそいそとビデオデッキを操作してから戻ってきた。

ビデオの再生が始まり、製作会社のロゴであろう『KC』という……、KC？

『まっさかー』と思っていたが、次にビデオ内容のタイトルが派手にレタリングされデカデカと画面に登場した。

【バトルシティ決勝トーナメント全試合総集編】

あ、うん。

ここ元の世界じゃないわ。

こうして僕は若返り&遊戯王世界にトリップをしたのだった。

とまあこんな感じで、デュエルが強ければ大体のことはまかり通る遊戯王世界にいるわけだ。

ちなみにデッキはこの世界に来る直前に友人とのデュエルで使用していたものが自室の机の上にぽつんと置いてあったので、それを調整しながら今現在も使用している。

デュエルアカデミア、丸藤亮、という名詞から分かると思うが、こ

こは遊戯王GXの世界線かつ主人公達と同じ世代なのだ。

僕は諸事情により他の新入生よりも1週間ほど早くアカデミアに
来ている。そのため船着き場に『カイザー』と名高い丸藤先輩が来て
いても騒がれる心配は少ない。

「よし、それでは行くか。顔見知りということ君を校長室まで道案
内するよう頼まれている」

「なるほど。だから丸藤先輩がここにいたんですね」

散歩中にたまたま会っただけかと思ってた。

「そういうことだ。今は春休みだから校舎にはデュエルフィールドく
らいしか生徒はいない。一緒に行っても変な噂や妬みはないはずだ」

お、さすがに自分が有名人だと自覚があるからこういう配慮はする
のか。しかし『カイザー』ねえ。

「僕もカイザーって呼びましょうか？」

「よしてくれ。君にカイザーと呼ばれるのは違和感しかない。今まで
通り先輩呼びで大丈夫だ」

「了解です」

などと雑談をしつつ歩いていると、目的の校長室の前に到着した。

「校長、例の新入生を連れて来ました」

「うむ、入ってくれたまえ」

失礼します。と丸藤先輩と声を合わせて言ってから扉を開くと、ハ
g……スキンヘッドで髭が立派な男性がゲンドウポーズを決めてい
た。

「ようこそデュエルアカデミアへ。私は校長の鮫島さめじまといいます。まず
は入学おめでとう。今は春休みなので校舎は静かですが、新学期が始
まれば他の新入生も加わって賑やかになります。君の以前の状態と
現状は資料で読ませてもらいましたが、どうしても君本人に確認した
かったのでここへ呼びました。

症状は今はどうですか？」

「はい。今のところ特に不調はありません。受験会場でのデュエルも
問題なくできました」

僕の返事を聞くと、鮫島校長はゆっくり頷き、

「それを聞いて安心しました。今後体調不良などがあつた場合は、保健の鮎川先生あゆかわに相談すると良いでしょう。もちろん私や、気心の知れた丸藤君でもいいですよ」

と穏やかに助言をくれた。

「長い船旅で疲れたでしょうし、今日はここまでにしておきましょう。君の寮は、着ている制服から分かるように『ライイエロー』です。部屋には事前に送った荷物が届いているはずなので、ちゃんと今日中に確認しておくように。それではまた後日」

「分かりました。失礼しました」

「失礼しました」

僕と丸藤先輩は校長室から退室した。

「……実際に会っても強者の雰囲気は感じられませんね。本当にあの少年が、カイザーと称される丸藤亮が負け越こしている相手なのか……？」

#02 5年振りの対戦（前）

「じゃあ俺はここで。イエロー寮の場所はPDAにも載っているから迷うことはない」

「お忙しい中ありがとうございます」

「ああ。次会う時は久しぶりにデュエルをしよう」

そう言うのと、丸藤先輩は踵を返してどこかへ行ってしまった。

僕が断るのが分かってたから返事をする前に去ったのだろう。

「丸藤先輩とデュエル、か」

ギャラリーがいないなら、まあいいかな。

PDAの地図を頼りにイエロー寮にたどり着いた。

寮長の教師に挨拶すると部屋の鍵を渡された。荷物は既に部屋に運んであるとのことだ。

僕は、これからしばらく過ごすことになるイエロー寮の間取りや廊下を覚えながら当てがわれた部屋に向かった。

（そういえば寮って相部屋なのかな？）

ふとそんな心配が頭をよぎったが、今更考えても仕方ないことだ。

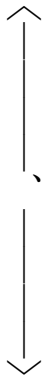
鍵の番号と同じ数字が書かれたドアのプレートを見つけ、鍵を開けて部屋に入った。

幸いなことに部屋には誰もおらず、生活感もなかったのでとりあえずは1人部屋なのだろう。他の新生が入寮した後はどうなるかわからないけど。

「ふう、疲れた……」

↑、 ↓

「えっ？ 今日はまだデュエルしてない？ いやいや今日はもうやらないよ、相手もいないし」



「丸藤先輩？ さっきの感じなら頼めばすぐやってくれそうだけど
さあ」



「はあ。まあどうせやるなら目立たない今の方がいいか」

僕はPDAを操作して、登録してある丸藤先輩宛てにメッセージを
送った。

「目立たない今のうちに丸藤先輩とデュエルしたいのですが、今から
時間大丈夫ですか？」

送信して1分も経たないうちに返信が来た。女子高生並みのレス
ポンスの良さだな。

【問題ない。場所は俺が押さえておく。デュエルフィールドの場所が
確定し次第追って連絡する】

あ、観客がいないことを条件に追加しておかないと。

その旨を追伸したら【了承】と返ってきた。これでよし。

5分後、丸藤先輩から対戦場所の情報が地図付きで送られてきた。
デッキ、デュエルディスクを持って僕は指定された場所へ向かっ
た。

「——来たか」

地図を頼りになんとか迷わず指定されたデュエルフィールドにた
どり着いた。

そこは要望通りに観客は誰もおらず、僕が入ってきた後は丸藤先輩
によって出入り口がロックされた。

「最後に対戦したのは5年前、俺も君も小学生の頃か。今までの戦績

では負け越しているが、俺もあの頃よりもずっと強くなった。もうあの時のようなことには、絶対にさせない。それを証明するために、俺は君に勝つ！ 行くぞ、霧遊きりゆう！」

『デュエル!!』

霧遊 響也 LP：4000

VS

丸藤 亮 LP：4000

先攻をランダムに決めるデュエルディスクの機能は、僕の先攻を示した。

「僕の先攻、ドロロー。僕は魔法カード《テラ・フォーミング》を発動。

デッキからフィールド魔法1枚を手札に加える。僕が選ぶカードは、

《ジエネレイド・ステージ王の舞台》!」

「来たか、ジエネレイド王の始動カード」

「僕は手札に加えた《王の舞台》を発動。フィールドは、各々の種族を束ねる王達に相応しい舞台となる」

ソリッドビジョンにより変化した周囲の映像、その中心には雪の結晶のような六角形のモニュメントが現れた。

「更に僕は魔法カード《暗黒界の取引》を発動。その効果によりお互いのプレイヤーはデッキから1枚ドロローし手札を1枚捨てる」

「それは以前は使っていなかったな。手札交換のカード……、いや、まさか!」

「《暗黒界の取引》の処理後にフィールド魔法《王の舞台》の効果発動。1ターンに1度、相手がデッキからカードを手札に加えた場合、デッキから『ジエネレイド』と名のつくモニュスター1体を守備表示で特殊召喚できる。僕が呼び出すのは《ひかりジエネレイド光の王 マルデル》!」

フィールドのモニュメントの一角が黄緑色に点灯すると、柔らかい日差しが降り注ぎ、その光の中から背中^{ひかり}に蝶のような羽を持つ美しい女性が現れた。

光の王 マルデル

星9／光／植物族／ATK2400／DEF2400

「マルデルの効果発動！ 召喚・特殊召喚に成功した場合、他の『ジエネレイド』と名のつくカードか植物族モンスターをデッキから手札に加える。僕は《王の試練》ジエネレイド・クエストを手札に加え、そのまま発動！ 手札の『ジエネレイド』と名のつくモンスター《氷の王》こおりジエネレイドニードヘツグ》を見せ、デッキから名前の異なる『ジエネレイド』魔法・罨を2枚手札に加える。僕は《王の支配》ジエネレイド・テリトリと2枚目の《王の舞台》を選ぶ。その後見せたモンスターをデッキの一番下に戻す」

続々と入れ替わり、目的のカードを手中に収めていく。

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

霧遊 響也

LP：4000

手札：3枚

モンスター：光の王 マルデル（守）

魔法・罨：王の舞台（フィールド）、伏せ×2

好調な滑り出しの僕に対して、丸藤先輩は安心したように息をついた。

「ふっ、どうやら腕は衰えていないようだな。それでこそ倒す意味がある。俺のターン、ドロー！」

「この瞬間、《王の舞台》の効果発動。デッキから『ジエネレイド』と名のつくモンスター1体を守備表示で特殊召喚できる。現れる《死の王》ジエネレイドへル》！」

そして《王の舞台》のもうひとつの効果が発動。相手ターンに自分が『ジエネレイド』と名のつくモンスターの特殊召喚に成功した場合、自分フィールドに《ジエネレイドトークン》を可能な限り攻撃表示で特殊召喚できる。出でよ、3体のジエネレイドトークン」

フィールドのモニュメントの、さつきとは別の一角が紫色に点灯

し、揺らめく黒い霧が立ち込める。それが晴れると、2本の角と暗闇色のドレス、先端がドクロを模した杖を身につけた美女が現れた。次いでトークンとしてモニュメントの色違いのものが3つ、フィールドに出てきた。

死の王 ヘル

星9 / 闇 / アンデット族 / ATK 800 / DEF 2800

ジェネレイドトークン ×3

星4 / 光 / 天使族 / ATK 1500 / DEF 1500

「場を埋めるほどの凄まじい展開か。だがこの程度、恐れるほどではない。相手の場にモンスターが存在し、自分の場にモンスターが存在していない場合、このモンスターは手札から特殊召喚できる。来い《サイバー・ドラゴン》！」

丸藤先輩のフィールドに鋼鉄でできた竜が現れた。

サイバー・ドラゴン

星5 / 光 / 機械族 / ATK 2100 / DEF 1600

「《プロト・サイバー・ドラゴン》を召喚！ このモンスターはフィールド上にいる限り『サイバー・ドラゴン』として扱う。そして魔法カード《融合》を発動！ 場の『サイバー・ドラゴン』扱いのプロト・サイバーと手札の《サイバー・ドラゴン》で融合！ 現れる《サイバー・ツイン・ドラゴン》！」

サイバー・ツイン・ドラゴン

星8 / 光 / 機械族 / ATK 2800 / DEF 2100

「《サイバー・ツイン・ドラゴン》は2回攻撃が可能だ。トークンは殲滅させてもらう。バトルフェイズ！」

「バトルフェイズ開始時、《死の王 ヘル》の効果発動！ この効果は

相手ターンでも発動できる。自分フィールドの『ジエネレイド』と名のつくモンスターかアンデット族モンスター1体を生け贄に捧げ、そのモンスターと名前の異なる自分の墓地の『ジエネレイド』と名のつくモンスターかアンデット族モンスター1体を守備表示で特殊召喚できる。僕は《ジエネレイドトークン》1体を生け贄に捧げ、墓地の《鉄の王^{くろがねジエネレイド} ドヴェルグス》を特殊召喚！」

^{みたび}三度モニュメントの一角が今度は青白く点灯し、全身が鋼鉄の装甲で組まれた巨軀が出現した。その手には身体の装甲と同じ素材で作られた鉄槌が握られている。

鉄の王 ドヴェルグス

星9 / 地 / 機械族 / ATK1500 / DEF2500

「その後《鉄の王 ドヴェルグス》の効果が発動する。この効果は相手ターンでも発動できる。自分フィールドの『ジエネレイド』と名のつくモンスターか機械族モンスターを任意の数生け贄に捧げ、その数だけ生け贄に捧げたモンスターと名前の異なる『ジエネレイド』と名のつくモンスターか機械族モンスターを手札から守備表示で特殊召喚できる。僕は《ジエネレイドトークン》2体を生け贄に捧げ、手札から《剣の王^{つるぎジエネレイド} フローデイ》と《炎の王^{ほのおジエネレイド} ナグルファー》を特殊召喚！」

モニュメントには金と赤の2色が同時に点灯し、フィールドには黄金の大剣と巨大な火球が現れた。上空からふわりと舞い降り、大剣を引き抜いた翼を持つ騎士王。火球が形を変え、それが自身が纏う炎となる獣王。

剣の王 フローデイ

星9 / 風 / 戦士族 / ATK2500 / DEF2000

炎の王 ナグルファー

星9 / 炎 / 獣戦士族 / ATK3100 / DEF2000

「蘇生させた《鉄の王 ドヴェルグス》は《暗黒界の取引》で捨てていたのか。隙のない動きだ。そして壮観だな。フィールドに5体の王ジエネレイドが並び立っているとは。しかし攻撃はさせてもらおう。《サイバー・ツイン・ドラゴン》で《炎の王 ナグルファア》を攻撃！ エヴォリューション・ツインバースト第1打！」

《サイバー・ツイン・ドラゴン》の片方の頭の口に光が収束していく。「それはさせない。攻撃宣言時、《剣の王 フローディ》の効果発動！ この効果は相手ターンでも発動できる。自分フィールドの『ジエネレイド』と名のつくモンスターか戦士族モンスターを任意の数生け贄に捧げ、その数だけフィールドのモンスターを対象に取り破壊できる。僕はフローディ自身を生け贄に捧げ《サイバー・ツイン・ドラゴン》を選択！」

「ならば手札から速攻魔法《融合解除》を発動！ 破壊対象にされている《サイバー・ツイン・ドラゴン》を融合デッキに戻し、融合素材となったモンスターが1組墓地にそろっていればそれらを特殊召喚できる！」

「まだだ。リバースカード、オープン！」

《王ジエネレイド・テリトリの支配》！ 自分の『ジエネレイド』と名のつくカードの効果の発動にチェーンして相手が魔法・罠・モンスターの効果を発動した時、手札を1枚捨てて発動。その相手の効果は『お互いのプレイヤーはそれぞれデッキから1枚ドローする』に書き換わる！」

ソリッドビジョンの《融合解除》のテキストが『お互いのプレイヤーはそれぞれデッキから1枚ドローする』に書き換わった。

「これでフローディの効果対象である《サイバー・ツイン・ドラゴン》は融合デッキに戻らない。書き換わった《融合解除》の効果によりお互いドローした後、フローディの効果でサイバー・ツインを破壊！ その後フローディの効果により相手は破壊された数だけドローできる」

「くっ、サイバー・ツインが……。フローディの効果により更にドロー。ならば《サイバー・ドラゴン》で《炎の王 ナグルファア》に攻撃！ エヴォリューション・バースト！」

「ナグルファアーは1ターンに1度、自分フィールドのカードが戦闘・効果で破壊される場合、『ジエネレイド』と名のつくモンスターか獣戦士族モンスターを代わりに破壊できる。ナグルファアーの代わりにマルデルを破壊」

あらまあ、という感じでこちらに手を振りながらマルデルがスツと消えた。おそらく墓地に行く動作なのだろう。

「む、攻撃力が高いナグルファアーだけでも破壊しようと思ったのだがな。メインフェイズ2、俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」

丸藤 亮

LP：4000

手札：1枚

モンスター：サイバー・ドラゴン（攻）

魔法・罨：伏せ×2

霧遊 響也

LP：4000

手札：1枚

モンスター：死の王 ヘル（守）、鉄の王 ドヴェルグス（守）、炎の王 ナグルファアー（守）

魔法・罨：王の舞台（フィールド）、王の支配（永続罨）、伏せ×1

#03 5年振りの対戦（後）

霧遊 きりゆう 響也 きょうや

LP：4000

手札：1枚

モンスター：

死の王 し ジェネレイド ヘル（守）、鉄の王 くろがね ジェネレイド ドヴェルグス（守）、炎の王 ほのお ジェネレイド ナグ

ルファアー（守）

魔法・罠：

王の舞台 ジェネレイド・ステージ（フィールド）、

王の支配 ジェネレイド・テリトリ（永続罠）、伏せ×1

丸藤 亮

LP：4000

手札：1枚

モンスター：サイバー・ドラゴン（攻）

魔法・罠：伏せ×2

「僕のターン、ドロロー。スタンバイフェイズ中に《死の王 ヘル》の効果発動。《鉄の王 ドヴェルグス》を生け贄に捧げ、墓地の《光の王 ひかり マルデル》を守備表示で特殊召喚する。もう一度よろしく、マルデル」

ヘルが自身の持つドクロの杖を一振りすると、場のドヴェルグスが沈んでいき、別の場所に黒い霧が立ち込める。その霧の中からマルデルが『ご機嫌よう』という感じで手を振りながら現れた。手振るの好きだね、君。

光の王 マルデル

星9／光／植物族／ATK2400／DEF2400

「特殊召喚されたマルデルの効果発動。デッキから『ジェネレイド』と

名のつくカード《ジエネレイド・バトル王の襲来》を手札に加える。そして手札から魔法カード

《くじぎ九字切りの呪符》を発動！ 手札か場の表側表示のモンスターの中からレベル9のモンスターを墓地に送ることで、デッキから2枚ドロウする。僕はフィールドのマルデルを墓地に送り2枚ドロウ！」

蘇生したと思ったらすぐさま墓地にとんぼ返りのマルデルは困り顔で腕組みをした状態で消えていった。すまない、君の効果は出た時だけだから……。

「ナグルファアを攻撃表示に変更し、バトル！」

「バトルフェイズ開始時、トラップ罠カード《アタック・リフレクター・ユニット》を発動！ 自分の場の《サイバー・ドラゴン》を生け贄に捧げ、手札・デッキから《サイバー・バリア・ドラゴン》を特殊召喚する。デッキよりあらわ顕れよ、サイバー・バリア・ドラゴン！」

サイバー・ドラゴンが消えると、それよりも一回り大きく装甲の厚い、防御に特化している鋼鉄竜が現れた。

サイバー・バリア・ドラゴン

星6／光／機械族／攻800／守2800

攻撃表示のサイバー・バリア・ドラゴンは、相手モンスターの攻撃を1ターンに1度無効にできる。

こちらのフィールドの攻撃表示モンスターはナグルファアのみ。

これでは攻撃する意味はない。

であれば方針変更、いわゆるプランBだ。

「手札から速攻魔法《せいいぶつ星遺物の胎導》を《死の王 ヘル》を対象に発動！ このカードは2つの効果から1つ選択して発動する。今回は対象の自分の場のレベル9モンスター1体と種族・属性の異なるレベル9モンスター2体をデッキから特殊召喚する方だ。ただしこの2体は攻撃できず、ターン終了時に破壊される。僕は2体目の《つるぎ剣の王 フロウディ》と《こおり氷の王 ニードヘッグ》を守備表示で特殊召喚！」

前のターンにいたのと同じではないが、黄金の大剣を持つ有翼の騎

士王が再臨した。

そして新たにモニュメントの一角が蒼く点灯すると、フィールドに氷塊が出現した。その氷塊は徐々に亀裂が入っていき、最後は甲高い音をたてて割れ、氷の体躯と翅つばさを持つ幻想の竜王が姿を見せた。

剣の王 フローディ

星9／風／戦士族／ATK2500／DEF2000

氷の王 ニードヘツグ

星9／水／幻竜族／ATK2100／DEF2600

「その後フローディの効果を発動！ フローディ自身を生け贄にして《サイバー・バリア・ドラゴン》を選択し破壊する。敵を斬り払え、フローディ！」

フローディが消える間際に残した斬撃がサイバー・バリア・ドラゴンを両断した。

「フローディの効果により破壊されたモンスターの数だけ相手はドローできる。これは任意ですがドローしますか？」

「……ドローする」

丸藤先輩は少し考えデツキから1枚ドローした。

「この瞬間、《王の舞台》の効果発動！ 1ターンに1度、相手がデツキからカードを手札に加えた場合、デツキから『ジエネレイド』と名のつくモンスター1体を守備表示で特殊召喚する。現れる《虚のジエネレイド王 ウートガルザ》！」

フィールドのモニュメントの一角が灰色に点灯すると、辺りに地鳴りのような低音が響くと、白亜の城塞が浮遊して現れた。

虚の王 ウートガルザ

星9／光／岩石族／ATK2200／DEF2700

「その後ウートガルザの効果を発動！ 自分フィールドの『ジエネレイド』と名のつくモンスターか岩石族モンスターを合計2体生け贄に

捧げ、相手フィールドのカード1枚を対象に取り除外する。僕はウー
トガルザとニードヘッグを生け贄に捧げ、残りの伏せカードを選択。
異次元に弾き飛ばせ、ウートガルザ！」

ウートガルザは白亜の城を嘶かせ、異次元への扉を開いていく。

「どうせ除去されるならば、リバースカードオープン《和睦の使者》！

このターン自分のモンスターは戦闘破壊されず、戦闘ダメージも受
けない！」

「それに対して永続罫^{ジェネレイドニトリトリ}《王の支配》の効果発動！ 手札を1枚捨て、
自分の『ジェネレイド』と名のつくカードの効果にチェーンした相手
カードの効果をお互いのドローに書き換える！」

ソリッドビジョンの《和睦の使者》の女性たちは、効果が書き換わっ
たため慌てて僕らにカードを持つてくる。

「これでモンスターも伏せも無くなった。ナグルフアーで丸藤先輩に
ダイレクトアタック！ 劫火で焼き尽くせ、ナグルフアー！」

ナグルフアーは身体の炎を前方に集めて巨大な火球を形成し、それ
を敵に向かって打ち出した。その火球は相手フィールド辺りで爆発
したため、爆煙が丸藤先輩の姿を隠す。

「避けられたか」

「ああ、俺はナグルフアーの攻撃宣言時、墓地の《超電磁タートル》の
効果を発動していた。超電磁タートルは墓地から除外することで相
手のバトルフェイズを強制的に終了させる」

煙が消えて視界が良くなったが、丸藤先輩のライフは全く減ってい
ない。

「最初のターンの《暗黒界の取引》で捨てていましたか。隙がないのは
そちらもですね。バトルフェイズの強制終了によりメインフェイズ
2に移行。僕はカードを2枚伏せてターン終了」

霧遊 響也

LP：4000

手札：2枚

モンスター：

死の王 ヘル（守）、炎の王 ナグルファア（攻）

魔法・罫：

王の舞台（フィールド）、王の支配（永続罫）、伏せ×3

丸藤 亮

LP：4000

手札：3枚

モンスター：なし

魔法・罫：なし

「相変わらず強いな、霧遊。だが俺も5年間何もしていなかったわけではない！俺のターン、ドロロー！」

丸藤先輩は勢いよくドロローする。

ドロローに気合いを入れてもデッキトップが変わるわけない、という前世の常識はこの世界のデュエリストのディスプレイニードロー率の高さを実感して以来消え去っている。

カードは創造するモノじゃないだけまだマシかな、って……。

「ドロローした瞬間、《王の舞台》の効果発動。デッキから2体目のマルデルを準備表示で特殊召喚。更に舞台の2つ目の効果と特殊召喚したマルデルの効果が発動。まずマルデルの効果でデッキから2枚目の《ジエネレイド・クレスト王の試練》を手札に加える。次に王の舞台の効果で《ジエネレイドトークン》を2体特殊召喚」

光の王 マルデル

星9／光／植物族／ATK2400／DEF2400

ジエネレイドトークン ×2

星3／光／天使族／ATK1500／DEF1500

うん、《王の舞台》強いんだけど、相手の通常ドロローにも反応できる

から相手の出鼻挫いちゃうんだよね。

しかし丸藤先輩は怯まない。

元からこつちのデッキの動きを知っているというのもあるが、このターンに決着をつけるという強い意気込みを感じる。

「相手フィールドにのみモンスターが存在するため、手札から《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚！　そして魔法カード《死者蘇生》を発動！　墓地の《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚する。並び立て、サイバー・ドラゴン！」

サイバー・ドラゴン　×2

星5／光／機械族／ATK2100／DEF1600

「カードを1枚伏せ、魔法カード《天よりの宝札》を発動！　お互い手札が6枚になるようにドローする。俺は5枚ドロー！」

出たよ、強すぎアニメ効果カードの最高峰。

「……僕は3枚ドロー」

「《プロト・サイバー・ドラゴン》を召喚し、バトルフェイズに入る。サイバー・ドラゴンでジェネレイドトークンに攻撃！　エヴオリューション・バースト！」

「サイバー・ドラゴンの攻撃宣言時、《虚の王　ウートガルザ》の効果発動！　ジェネレイドトークンとマルデルを生け贄に捧げ、攻撃したサイバー・ドラゴンを選択し除外する！」

「それに対して手札から速攻魔法《瞬間融合》を発動！　フィールドのサイバー・ドラゴン2体と《サイバー・ドラゴン》扱いのプロト・サイバー・ドラゴンで融合する！」

「ならばそれにチェーンして《王の支配》ジェネレイド・テリトリの効果発動！　手札を1枚捨て、瞬間融合の効果をお互いのドローに書き換える！」

「同じ手は食わん。更に速攻魔法《サイクロン》を発動し《王の支配》を破壊する！　永続系の魔法罫はチェーンして除去すれば効果は残らない。よって瞬間融合の効果はそのままだ！　3体の《サイバー・ドラゴン》で融合、あらかわ顕れよ《サイバー・エンド・ドラゴン》！」

サイバー・エンド・ドラゴン

星10／光／機械族／ATK4000／DEF2800

サイバー・エンド・ドラゴン。三つ首と機械翼を持つサイバー・ドラゴンの最終形態。サイバー流の切り札。

《パワー・ボンド》と《リミッター解除》を使えば攻撃力16000という超火力を叩き出すこともできる神クラスのモンスターだ。

「《サイバー・エンド・ドラゴン》は守備表示モンスターを攻撃した場合、その守備力を攻撃力が超えた分だけ戦闘ダメージを与える、でしたね」

「ああ。そして《瞬間融合》で融合召喚したモンスターはエンドフェイズに破壊されるが、このターンに決着をつければ問題ない。サイバー・エンド・ドラゴンでヘルを攻撃！」

「攻守の差は1200。ライフは残る」

「この攻撃力のままでは、な。ダメージステップに手札から速攻魔法《リミッター解除》発動！ 自分フィールドの機械族の攻撃力は倍になる！ これでサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力は8000！

撃ち砕け、エターナル・エヴオリュション・バーストオオオ!!」
ふう。

「お見事です、丸藤先輩」

霧遊 響也 LP：4000 ↓ 0

丸藤 亮 WIN

#04 戦いの後

デュエルの決着がついたのでソリッドビジョンが消えていく。

「いやあ、負けました。完敗です」

「……ああ。今の霧遊のデッキならば、おそらく俺の勝率が高くなるだろう」

丸藤先輩は釈然としない様子で言葉を続けた。

「単純にデチューンしたわけではない。以前は使っていなかった相性の良いカードも入っていた。『発展させつつ出力を抑えた』と言ったところか」

「**明察**」

ただギミックを劣化させれば、手を抜いていると思われる。だったら、ギミックそのものを入れ替えればいい。

本筋から枝分かれした細かいルートを選び、そこを精一杯辿ればそれは『本気』だ。

「だがそれは『本気』であつても『全力』ではない。そしてそれは『禁じ手』が存在するサイバー流にも言えること。ゆえにその事に関して俺は文句を言うことができない。なんとも君らしい理論武装だ」

「……今日は疲れたので、もう休みます」

「ああ。疲れてる中、誘ってくれてありがとう。」

……そして俺の自己満足に付き合わせてすまない」

僕は話の途中からデュエルフィールドの出入り口に向かっていたので、最後の言葉を丸藤先輩がどんな顔で発したのかは分からなかった。

自室へ戻り、ドアの鍵をかける。

「……疲れた。久しぶりに長めのデュエルだったな」

平均的な同年代とのデュエルでは、ナグルファアが出たあたりではとんとの人が戦意喪失する。

「満足したかい？ みんな」

僕がそう言うのと、周囲に黄緑・紫・金色の光る粒子が現れ、それぞれが人型に集まっていく。

《ええ、フィールドと墓地の反復横跳びがなければ尚良かったですね》

《すまぬ……、わらわの守備力が足りぬばかりに主様の負けに……》

《お二方、主君はお疲れになっておられる。そのような心労を与える言動は慎まれよ》

粒子の発光と凝縮が止むと、そこには《光の王 マルデル》、《死の王 ヘル》、《剣の王 フローディ》の三体が半透明の状態で宙に浮いていた。

「マルデルはごめんね。ヘルは気にしないで。フローディは氣遣ってくれてありがとう。他の子たちは？」

《ドヴェルグスは各パーツのメンテナンス、ニードヘッグは出ただけだから辞退、ナグルファアはほとんど暴れられなかったと不貞寝、ウートガルザは何を考えているかよく分からないので置いてきましたわ》

少し不機嫌だけど、他の王たちの様子を伝えてくれるマルデル。

「あー、現状で短時間で可能なことならなんでもするから機嫌直してよ、マルデル」

僕がそう提案すると、マルデルは『待ってました！』と言わんばかりに満面の笑みに早変わりした。どうやら不機嫌な様子はポーズだったらしい。

《それではご主人様。わたくし、膝枕というのをしてみたいですわ。もちろん寝転がる役はご主人様の方ですよ？》

いそいそとベッドの枕側に座り、実体化してから自らの太ももをポンポンと叩いてこちらを急かす。

《なッ!? マルデル！ 膝枕の順番はジャンケンで決めると申ししたで

あろう!!」

「出てきてからずっと謝罪し続けるあなたが相手では、ご主人様も気が休まらないと思つての配慮ですわ」

《ぐっ、その通りなので言い返せぬ……》

「というわけでご主人様。どうぞこちらへ♪」

僕は促されるまま、マルデルの太ももに頭を乗せて仰向けに寝転んだ。

花のようないい匂いがして、若干強張っていた身体の力がゆるゆると抜けていく。その心地よさに、

まぶた 瞼が重くなる。

「夕食のお時間には起こして差し上げますわ。今はどうか、お休みになつてくださいませ」

先ほどまでと違い、穏やかな声色でマルデルは囁く。

《しばし休まれよ、主様。因果ある者との決闘は消耗しやすい。心も、魂バも》

《警備はお任せを。主君の安寧を妨げる者は何人たりとも近づけさせません》

うん、おやすみ。

声に出す前に途切れた僕の言葉に、3つの返事が聞こえた気がした。

同時刻、イエロー寮内。

「えーと、霧遊くんのお部屋は……あれ? どこなの?」

「おかしい。キリユウの部屋に辿り着けない」

「ここ男子寮やねんから、はよう見つけんと騒ぎになるぞ?」

「カイザー先輩の証言だから、少なくともアカデミア内にはいるはずよ」

「もしかしたら、まだ寮に帰ってないのかもしれないよ?」

「丸藤のやつもデュエルフィールドで別れたらしいからねー。今日はとりあえず退却しましょ」

6人の女子生徒が侵入していたが、幸か不幸か寮生には気づかれることはなかった。

夕飯の時間の10分前、マルデルに揺り動かされて目を覚ました。

その後、軽く身支度を整えてから寮内の食堂へ出向いた。

イエロー寮の在校生には『見ない顔だな』と首を傾げられたが、食事前に寮長の樺山^{かほやま}先生の紹介で、僕が新入生である事・持病の関係で他の新入生より先に来ている事・具合が悪そうだったら自分か鮎川先生に連絡してほしい事を周知してくれた。

ライイエローはオベリスクブルーほどではないが選民思想に染まっている者もいると聞いていたが、少なくとも表立って敵意や悪意を向けてくる人はいなかった。

夕飯のカレーは、本格的でとても美味しかった。

#05 同類の憐み

「へえー、ここがレッド寮かあ」

真新しい赤いアカデミアの制服を着た少年が、明らかにボロボロな建物を前に感嘆の声を上げた。

「俺の部屋は、ここか!」

少年は、これまたボロボロな寮の部屋のドアを勢いよく開ける。

「うわわ!?! な、なんスか!?!」

いきなりの突撃に室内の小柄な少年が驚いて目をむく。

「お、同室の奴か。俺は遊城十代^{ゆうきじゅうだい}。よろしくな!」

「うわー、元気な人っスねー。おいらは丸藤翔^{まるとうしょう}っていうっス」

「翔か、よろしくな!」

「よろしくお願いするっス」

「翔は新入生か?」

「そうっスよ」

「よし、一緒に探検に行こうぜ!」

「え? 探検って」

「よし、しゅっぱーっ!!」

「ちよ、ちよっど〜!?!」

元気な少年／遊城十代は、同室の少年／丸藤翔の腕を引っ張り走り出した。

真っ先に目に入ったアカデミア校舎に向かって。



僕が他の新入生に先んじて入寮してから1週間が経った。

特に目立つような行動をしなかったのが功を奏し、変に突つかかってくる生徒はいなかった。

丸藤先輩とのデュエル以降、校舎には近寄っていないので他寮の生徒と遭遇していないから、という理由も大いにあると思うが。

「そういうえば、日程では今日が新入生の入寮日のはず」

そうすると、ここイエロー寮もそのうち騒がしくなるだろう。

先輩方も何かしら準備をしなければならぬのか、先ほどから忙しくなく作業している人が見て取れる。

「それなら、校舎は逆にガラ空きかも」

下手に質問しては手伝いを言い渡される恐れがあるので、僕はこっそり寮を抜け出し校舎に向かった。



「ここはエリートであるオベリスクブルーの生徒が使うデュエルフィールドだ。貴様らのようなオシリスレッドが入っていない場所ではない！」

自分たちを恫喝する青い制服の男子数人に対し、遊城十代は不敵な笑みを浮かべて挑発する。

「へっ、じゃあどっちが強いか試してみよーぜ！」

「貴様！ オシリスレッドの分際で！」

「まあ待て」

安い挑発に乗らない冷静さを、もしくは驕りを持って取り巻きを止める、一際エリート思想に染まっていそうな男子たちのリーダー格。

「面白い。この万丈目準が貴様に格の違いを教えてやろう」

「おっ！ お前がデュエルしてくれるのか？ よっしや、早くやろっぜ！」

明らかに見下す言動をしている相手だろうと関係なく、デュエル優先の遊城十代。デュエル馬鹿。

「あなた達、ここで何をしているの？」

今にも2人のデュエルが始まりそうな時に、それを諫める透き通った声が室内に響いた。

「て、天上院クン」

先程まで余裕ぶっていた万丈目は、突如現れた人物を見るや否や相好を崩す。

その人物は、中等部からアカデミアにいる者なら誰もが知っている有名人。

女子生徒の中でも抜群の強さを誇り、またその見目麗しさから数多の男子生徒の憧れの的まとなつている天上院明日香てんじょういんあすかである。

「もうすぐ歓迎会の時間よ。早く寮に戻った方がいいわ」

「ふ、ここは天上院クンの顔を立てて引くことにしよう」

そう言い残してデュエルフィールドを後にする万丈目とその取り巻き達。

「あなた達も。レッド寮は遠いから急がないと間に合わないわよ」

「マジか!? やべーな、急ぐぞ翔！ ダツシユだ！」

「ま、待ってよく、アキニ〜」

自分以外誰もいなくなったデュエルフィールドで、天上院明日香は独り言ごごちる。

「まあ、ここで待ってても来るとは限らないか」

そのデュエルフィールドは、先日丸藤亮と霧遊響也が使用したもの

であった。



「うーん。ゾロゾロとブルー生が来たからつい隠れたけど、ここどこだろう?」

絡まれたら厄介そうな雰囲気だったから、とっさにドアが開いてた部屋に入って隠れたのだが。

「ここは、講義室かな。大学形式の机の配置だし」

と、室内を見回していたら、一番後ろの席に誰か突っ伏していた。

(うおっ!? び、びっくりした……)

その人物は、どうやらこちらの存在に気付いていないようだった。

(というか、泣いてる?)

教卓側のドアから入ったので頭頂部しか見えないが、微かな嗚咽が聞こえた。

何と声をかければいいのか分からないが、放っておくわけにもいかず、

「あ、あの……」

と小声で話しかけると、『ビクッ!』と跳ね起きて目をまん丸に見開いた。

女の子だ。

肩にかかる程度の桜色の髪に、同系統の色のリボンをカチューシャのように巻いている。

数秒の思考停止の後、その子は弾かれたように駆け出し、

「へびっ!!」

盛大にずっこけた。

「だ、大丈夫?」

なんとなく居た堪れなさど罪悪感を感じつつその子に近付いてみると、デッキまでもを床にぶちまけてしまっていた。

向かう途中の僕の足元にも飛んできていたカードを拾って集める。デッキの中身を見られたくないデュエリストも多いので、カードの表は極力見ないように努めたが、ある1枚が見えてしまった。

『真六武衆―キザン』

「六武衆、か」

元の世界の遊戯王プレイヤーならば、このカード1枚だけでデッキの大きな構成は把握できるだろう。

遊戯王、こちらの世界ならばデュエルモンスターズというカードゲームにはカード名の一部が共通する『名称テーマ』という概念がある。

例えば今の『真六武衆―キザン』の効果には

自分フィールド上に「真六武衆―キザン」以外の「六武衆」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができると記されている。

この効果で特殊召喚するためには他の『六武衆』モンスターが必要で、それらも『六武衆』に関する効果を持つものが多い。

そうやってデッキ構築をしていくと、個々人で配分や一部のカードは異なるが、『六武衆デッキ』と称するべきものができあがる。

このカードのように効果の条件に名称の一部が指定されている場合は、汎用以外そのテーマカードで固めるのが安定して強い。

なかなかの強テーマ、と感心していると、

「……アンタもズルいとか思ってるんでしょ」

他のカードを拾い集めていた女の子が、諦めたように、悲しげに呟いた。

「どうしてですか？」

「ふえっ？」

しかし、僕が想定外のセリフを言ったことでその子はポカンと呆けてしまった。

「別に僕らは同じデッキ同士でデュエルするわけではないでしょう？
それならば、誰がどんなカードを手に入れられるか、どんなデッキ
を構築するかは、それこそ人の数だけ可能性があります。六武衆は珍
しいカードですが、それを手に入れられる縁えにしも含めてあなたの実力だ
と思いますよ」

おそらくこの子は、『珍しくて強いカードを使っている』という理由
でデュエルした相手や観戦者から非難を受けたのだろう。

だから、僕は伝えるべき言葉を口にした。

かつて、言っただけで済んだ言葉をあげた。

「そのデッキは、君だけが作れる君のためのデッキだ。それがズルい
なんて、絶対にあるもんか」

「うあ、あああ、うあああああんっ!!」

女の子が僕に縋り付いて泣き出す。

僕はその子の背中を優しく撫で続けた。

「…………ごめん。ありがと」

しばらくして落ち着いたその子は、どこかスッキリした声音でそう
呟いてから去っていった。

(たぶん『ごめん』は制服に関してかな)

僕の制服の肩から胸元にかけては、その子の涙(彼女の名誉のため
に涙だけということにしておく)で盛大に濡れていた。

安堵と羨望の入り混じる感情を持って余しながら、僕もその講義室を
後にする。

「あ」

「ん?」

再び女子生徒と遭遇。

ただし、さつきとは別人。

女子にしては高めの身長、ロングの薄茶の髪、凜々しい顔つき。

ああ。

「天上院明日香か」

言ってから（あ、やべ）と思ったが、

「あら、亮から聞いていたのかしら？　まあいいわ。ようやく探し

回っていた成果が出たようね」

丸藤先輩のおかげでどうにかなりそう。さすがカイザー。

しかし『探し回っていた』か。

厄介事の予感がヒシヒシとする。

「霧遊響也、私とデュエルしなさい」

#06 明日香の強さ（前）

「あの、そろそろ新入生歓迎会の時間では」

「私は予め欠席あらかじの連絡をしてあるから大丈夫。あなたは1週間前から寮に居るのだから、歓迎会なんて今更でしょう？　ということでデュエルなさい」

ダメだ、この人デュエルするまで絶対に逃がさないつもりだ。

「……はあ、分かりました。お相手しますよ、天上院さん」

「賢明な判断ね。ああそれと私、あなたと同じ学年だから敬語じゃなくっていいわよ。呼び方も明日香でいいわ」

「あー、敬語は癖なので気にしないでください。同じく癖でデュエル中は逆に言葉遣いが荒くなりますので、そちらも気にしないでください。名前は明日香さんと呼ばせてもらいますね」

「ふーん。ま、いいわ。じゃあ近くのデュエルフィールドまで行くわよ」

そう言うとき明日香さんは僕の制服の袖を掴んで引つ張っていく。背が高く運動神経も良さそうだから、隙を見て逃げるのは無理そうだ。

引つ張られていった先は、先日丸藤先輩とデュエルしたフィールドと同じ場所だった。

「デュエルディスクは自前のがあるようだし、すぐに始めるわよ」
「分かりました」

僕と明日香さんは、ソリッドビジョンが展開されるフィールドで向かい合い、ディスクをデュエルモードに移行する。

「さあ。亮が認める強さ、刮目させてもらうわ」

「ごちらも、女子トップクラスの實力を見せてもらいます」

『デュエルッ!!』

霧遊 響也 LP：4000

vs

天上院 明日香 LP：4000

ディスクの乱数判定によって、先攻は明日香さんだ。

「先攻は私ね。ドロロー！ 私は《エトワール・サイバー》を攻撃表示で召喚！」

エトワール・サイバー

星4／地／戦士族／ATK1200／DEF1600

両腕に包帯のようなりボンのような不思議な紐を纏った女性型のモンスターが明日香さんのフィールドに現れた。

「更にカードを2枚伏せてターンエンド」

天上院 明日香

LP：4000

手札：3枚

モンスター：エトワール・サイバー（攻）

魔法・罠：伏せ×2

「僕のターン、ドロロー。僕は魔法カード《九字切りの呪符》を発動。手札かフィールドからレベル9のモンスター1体を墓地に送ることでデッキから2枚ドロローする。僕は手札のレベル9モンスター《光の王マルデル》を墓地に送って2枚ドロロー。……カードを3枚伏せてターンエンド」

「……え、手札交換のカードを使って伏せカードだけって、モンスターは出さないの？」

「生憎と生け贄なしで手札から通常召喚するモンスターは、このデッキにはほとんど入っていない」

「なッ……!!? そんなバランスの悪いデッキで亮と渡り合えるなんて……」

まあ普通に考えるとバランスが悪いんだろうけど、「ジエネレイド王」はレベル9モンスターで回るのがコンセプトだからなあ。

霧遊 響也

LP：4000

手札：3枚

モンスター：無し

魔法・罠：伏せ×3

天上院 明日香

LP：4000

手札：3枚

モンスター：エトワール・サイバー（攻）

魔法・罠：伏せ×2

「負けても手札事故を言い訳にしないでね。私のターン、ドロ―！
私は《ブレード・スケーター》を召喚！」

両腕に大きな刃を付けたスケート選手のような女性型モンスター、
ブレード・スケーターがエトワール・サイバーと並び立つ。

ブレード・スケーター

星4／地／戦士族／ATK1400／DEF1500

「バトルよ！ エトワール・サイバーで――」

「バトルフェイズ開始時、リバースカードオープン！ ジエネレイド・バトル《王の襲来》

！」

「攻撃宣言時じゃなく、このタイミングで!?!」

「このカードは、まずデッキ・墓地から『ジエネレイド』と名のつくフィールド魔法を選んで発動できる。僕はデッキの《王の舞台》ジエネレイド・ステージを選ぶ。そしてその後、相手はデッキから1枚ドロウする!」

「わ、私がドロウするの? なんだか凄く損をするカードのような……?」

《王の襲来》の効果の微妙さに困惑しながらもドロウする明日香さん。

「その疑問はこのフィールド魔法によって解決だ。相手がデッキからカードを手札に加えた瞬間、《王の舞台》の効果発動! デッキから『ジエネレイド』と名のつくモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する。来い、《死の王 ヘル》!」

アンデット族の女王が『ゴゴゴゴッ』という効果音を響かせながら厳かに出現する。

いやいや、前回の事を気にしてるにしても気合い入り過ぎだろ。

死の王 ヘル

星9 / 闇 / アンデット族 / ATK800 / DEF2800

「そして相手ターン中に『ジエネレイド』と名のつくモンスターが特殊召喚されたことで《王の舞台》の更なる効果を発動! 攻守1500の《ジエネレイドトークン》を攻撃表示で可能な限り特殊召喚する!」

ジエネレイドトークン ×4

星4 / 光 / 天使族 / ATK1500 / DEF1500

「私のターンにモンスターを一気に5体も並べるなんて……。しかもエトワール・サイバーとブレード・スケーターの攻撃力ではどのモンスターも倒せない……。仕方ない、バトルフェイズを終了するわ。メインフェイズ2で魔法カード《融合》を発動!」

あ、融合握ってたんだ。

こつちにモンスター居なかったから、ダメージ量の多い融合前の2

体で先に攻撃しておこうと思っていたようだ。

「フィールドの《エトワール・サイバー》と《ブレード・スケーター》を融合！ 真のプリマは自らの光で舞台を照らし踊り続けるのよ！ 来なさい、《サイバー・ブレイダー》！」

長い髪をたなびかせ、赤いバイザーで目元を覆うバレリーナ、サイバー・ブレイダーが明日香さんのフィールドに舞い降りた。

サイバー・ブレイダー

星7／地／戦士族／ATK2100／DEF800

「更に私は永続魔法《一族の結束》を発動！ このカードは私の墓地のモンスターの種類が1種類の場合、同じ種族の私のモンスターの攻撃力を800ポイントアップさせるわ！ 私の墓地は戦士族のみ。よって同じく戦士族のサイバー・ブレイダーの攻撃力は2900となるわ！」

サイバー・ブレイダー

ATK 2100 ↓ 2900

「私はこれでターンエンド！」

「ならばそのエンドフェイズ中に《死の王 ヘル》の効果が発動！ この効果は相手ターンでも発動できる。自分フィールドの『ジエネレイド』と名のつくモンスターである《ジエネレイドトークン》1体を生け贄に捧げ、それとは名前の異なる自分の墓地の王^{ジエネレイド}《光の王 マルデル》を守備表示で特殊召喚する。現れるマルデル！」

ヘルが骸骨の杖を掲げて怪しげな呪文を唱えると、ジエネレイドトークン1体の下に魔法陣が現れてそのトークンを呑み込む。するとその魔法陣から暖かな光が溢れ出し、蝶の羽を持つゆるふわ美女が姿を現した。

光の王 マルデル

星9／光／植物族／ATK2400／DEF2400

こつちも気合いが入っているのか、いつもより3割増しで輝いていて眩しい。

「そして特殊召喚されたマルデルの効果を発動！ デツキから『ジエネレイド』と名のつくカード、《王の試練》ジエネレイド・クエストを手札に加える」

マルデルの周りを漂っている光の粒子がデツキに集まると、効果で選んだカードを指し示すようにソリッドビジョンがデツキの一部を通過していく。

「最後に《王の舞台》の効果で特殊召喚されたジエネレイドトークンはエンドフェイズに破壊される」

残り3体のジエネレイドトークンがガラスのように碎けて消えた。

天上院 明日香

LP：4000

手札：2枚

モンスター：サイバー・ブレイダー（攻）

魔法・罫：一族の結束（永続魔法）、伏せ×2

霧遊 響也

LP：4000

手札：4枚

モンスター：死の王 ヘル（守）、光の王 マルデル（守）

魔法・罫：王の舞台（フィールド）、伏せ×2

#07 明日香の強さ（後）

天上院 明日香

LP：4000

手札：2枚

モンスター：サイバー・ブレイダー（攻）

魔法・罫：一族の結束（永続魔法）、伏せ×2

霧遊 響也

LP：4000

手札：4枚

モンスター：死の王 ヘル（守）、光の王 マルデル（守）

魔法・罫：王の舞台（フィールド）、伏せ×2

「僕のターン、ドロー」

明日香さんのフィールドにいる融合モンスター《サイバー・ブレイダー》は、相手の場のモンスターの数に応じて効果が変化するという特殊なモンスターだ。

相手の場のモンスターが1体の場合、このカードは戦闘では破壊されない。

相手の場のモンスターが2体の場合、このカードの攻撃力は倍になる。

相手の場のモンスターが3体の場合、相手が発動したカードの効果は無効化される。

適用される効果はこの3種類。

効果が重複することはないから、場のモンスターの数を3体にさえしなければ突破することは難しくくない。

今、僕の場のモンスターはヘルとマルデルの2体なので――

「今あなたの場のモンスターは2体。よってサイバー・ブレイダーの攻撃力は倍になる。パ・ド・トロワ！」

サイバー・ブレイダー

ATK 2900 ↓ 5800

「その効果はこちらの場のモンスターを4体以上にすれば、どれも適用できない事は知っている。手札から速攻魔法《星遺物の胎導》を発動！ レベル9モンスター《死の王 ヘル》を対象に発動することで、ヘルとは種族・属性が異なるレベル9モンスター2体をデッキから特殊召喚する。出でよ《氷の王 ジエネレイド ニードヘッグ》！ 《虚の王 うつつろ ウートガルザ》！」

氷の王 ニードヘッグ

星9 / 水 / 幻竜族 / ATK 2100 / DEF 2600

虚の王 ウートガルザ

星9 / 光 / 岩石族 / ATK 2200 / DEF 2700

ジエネレイド 王 達の中でも比較的大きい出立ちの2体がフィールドに出現する。

「ただし、この効果で特殊召喚されたモンスターは攻撃できず、エンドフェイズに破壊される。だがこれで僕の場のモンスターは4体。《サイバー・ブレイダー》が適用する効果は無くなる」

サイバー・ブレイダー

ATK 5800 ↓ 2900

「そしてウートガルザの効果発動！ 『ジエネレイド』と名のつくモンスター2体、ウートガルザ自身とニードヘッグを生け贄に捧げること、フィールドのカード1枚を選択して除外する。僕はサイバー・ブレイダーを選択する！」

「させないわ。リバースカードオープン、《亜空間物質転送装置》！ 私の場のサイバー・ブレイダーをエンドフェイズまで除外する！ これでウートガルザの効果は対象を失って不発よ」

上手くサクリファイイス・エスケープしてくるなあ。生け贄じやなくて除外だけど。

「だがこれで壁となるモンスターもない。マルデルを攻撃表示に変更しバトルだ！ マルデルでダイレクトアタック！」

マルデルは『ようやくわたくしの見せ場ですわ！』と言うかのよう張り切つて攻撃するための光を収束しているところで――

「攻撃宣言時、罨^{トラップ}カード《和睦の使者》を発動！ このターン私のモンスターは戦闘破壊されず、戦闘ダメージは0となるわ！」

ソリッドビジョンの和睦の使者が申し訳なさそうにマルデルに歩み寄るが、せっかく攻撃してダメージをと思つていたマルデルは思いつきりメンチ切つていた。

美人が台無しである。

「このターンの攻撃は無駄か。メインフェイズ2に移行。カードを1枚伏せてターンエンド」

「エンドフェイズにサイバー・ブレイダーはフィールドに舞い戻り、一族の結束の効果で攻撃力が800アップ。そして相手の場のモンスターが2体なので攻撃力は倍になる。パ・ド・トロワ！」

サイバー・ブレイダー

ATK 2100 ↓ 2900 ↓ 5800

霧遊 響也

LP：4000

手札：3枚

モンスター：死の王 ヘル(守)、光の王 マルデル(攻)

魔法・罨：王の舞台(フィールド)、伏せ×3

天上院 明日香

LP：4000

手札：2枚

モンスター：サイバー・ブレイダー(攻)

魔法・罨：一族の結束（永続魔法）

「私のターン、ドロー！」

「この瞬間、《王の舞台》ジェネレイド・ステージの効果を発動！ 相手がデッキからカードを手札に加えた場合、デッキから『ジェネレイド』と名のつくモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚できる。それにチェーンしてセットしてあつた《星遺物の胎導》を《死の王 ヘル》を対象に発動！」

「え……そのフィールド魔法って通常ドローにも反応するの!？」

相手のドローフェイズでも発動するフィールド魔法の異様さに驚愕する明日香さん。

しかしその表情もすぐに戻り、こちらの動きに意識を集中する。

「逆順処理により《星遺物の胎導》の効果が先に発揮される。僕はデッキから2体のレベル9モンスター《剣の王 フローディ》と《巨大戦艦ブラスタージャノン・コア》を攻撃表示で特殊召喚！」

黄金の大剣を携えた有翼の騎士王——剣の王フローディと、円形から一部が引き抜かれたような形状の巨大宇宙船——巨大戦艦ブラスタージャノン・コアが僕のフィールドに現れた。

剣の王 フローディ

星9／風／戦士族／ATK2500／DEF2000

巨大戦艦ブラスタージャノン・コア

星9／地／機械族／ATK2500／DEF3000

「次に《王の舞台》の効果処理。『ジェネレイド』と名のつくモンスター、《炎の王 ナグルファー》を守備表示で特殊召喚！ その後、特殊召喚された《巨大戦艦ブラスタージャノン・コア》の効果発動！ このカードにカウンターを3つ置く。ブラスタージャノン・コアはこのカウンターを取り除くことで自身の効果破壊を免れることができる。ちなみにカウンターとは別効果で戦闘破壊耐性も持っている」

炎の王 ナグルファア

星9／炎／獣戦士族／ATK3100／DEF200

「相手のフィールドがレベル9モンスターで埋め尽くされてる……。こんな光景初めて見るわ……！」

明日香さんは目の前の光景に興奮しているようで、目を爛々と輝かせている。

（こんな人、初めてだ。今まで似たような盤面に直面したデュエリストは、恐怖か諦めの表情しかなかったのに……）

「私は手札から《強欲な壺》を発動。デッキから2枚ドロウするわ！」

忌々しい壺が明日香さんに^{新たな手札}可能性を与える。

「更に私はライフを100の倍数——2000ポイント払い、装備魔法《サイコ・ブレイド》を発動し、サイバー・ブレイダーに装備。このカードを装備したモンスターの攻撃力・守備力は、払ったライフの数値分アップするわ！」

サイバー・ブレイダーに幅広でエメラルド色の剣が装備される。

天上院 明日香

LP：4000 ↓ 2000

サイバー・ブレイダー

ATK 2900 ↓4900 / DEF 800 ↓ 2800

「バトルよ！ サイバー・ブレイダーで光の王マルデルに攻撃！ グリッカード・サイコ・スラッシュュ!!」

刹那の思考。

相手の突破手段の予想、自分のモンスターと伏せカードの効果、不確定要素も混じった現状での最善策を弾き出す。

「——攻撃宣言時、《剣の王 フローディ》の効果が発動！ この効果は相手ターンでも発動できる。『ジェネレイド』と名のつくモンス

ターか戦士族モンスターを任意の数だけ生け贄に捧げ、その数だけ相手モンスターを選択して破壊できる。僕はマルデルを生け贄に捧げ、サイバー・ブレイダーを破壊する！ 敵を斬り払え、フローディ!!」攻撃対象にされていたマルデルが光の粒子になって消え、フローディの大剣にその粒子が収束する。

その光が斬撃としてサイバー・ブレイダーに放たれる瞬間――

「手札から速攻魔法《我が身を盾に》を発動！ ライフを1500ポイント払うことで、フィールド上のモンスターを破壊する効果を無効にし破壊するわ！」

天上院 明日香

LP：2000 ↓ 500

このままフローディが破壊されればこちらの場のモンスターが3体になり、サイバー・ブレイダーの『発動したカード効果の無効』という強力な制圧効果が適用されてしまう。

「まだだ。それにチェーンして罠トラップカード《戦線復帰》を発動。自分の墓地のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する。再び現れる、光の王 マルデル！」

光の王 マルデル

星9 / 光 / 植物族 / ATK2400 / DEF2400

「フローディは効果を無効にして破壊できたけど、場のモンスターの数は4体以上をキープしていたからサイバー・ブレイダーの効果は適用されない、か」

「続けるぞ。特殊召喚されたマルデルの効果発動。デッキから『ジェネレイド』と名のつくモンスターである《鉄くろがねの王 ドヴェルグス》を手札に加える」

「なら、攻撃対象を巨大戦艦ブラスターキャノン・コアに変更して攻撃を続行するわ！ そしてダメージステップに速攻魔法《コンセントレ

イト』を発動！ 対象モンスター、サイバー・ブレイダーの攻撃力はターン終了時までその守備力分アップする！」

サイバー・ブレイダー

ATK 4900 ↓ 7700

「この攻撃が通れば——」

「——通れば、な。同じくダメージステップに、伏せていた速攻魔法《禁じられた聖槍》をサイバー・ブレイダーを対象に発動。対象モンスターはターン終了時まで攻撃力が800ポイントダウンし、このカード以外の魔法・罫の効果を受けない」

「——ッ!? それじゃあ……」

「《一族の結末》《サイコ・ブレイド》《コンセントレイト》の効果を受けなくなったサイバー・ブレイダーの攻撃力は元に戻り、さらに聖槍の効果で800ダウンする」

サイバー・ブレイダー

ATK 7700 ↓ 2100 ↓ 1300

「迎え撃て、ブラスターキャノン・コア！」

——主砲発射！」

「きゃあああっ!!」

天上院 明日香

LP:500 ↓ 0

霧遊 響也 WIN

#08 夕食とその後の明日香

「…………ふう」

大量展開する特性上、サイバー・ブレイダーの効果で封殺されないよう立ち回るのが地味に難しかった。

一時でも場のモンスターが3体になれば『発動した効果が無効にする』という強力無比な効果が適用されてしまうため、常に2体以下か4体以上にしていった。

「対戦、ありがとうございます」

初対面の人とのデュエルの場合、終了後のあいさつは忘れないように心掛けている。

半ば無理やりだったとはいえ、今後アカデミア内で関わる事になるだろうから心象は良いに越したことはない。

「ええ、こちらこそありがとうございます。確かな実力だと亮に聞いていたけど、想像以上だったわ」

明日香さんはデュエルフィールドの対面側からこちらへ来て、僕に握手を求めてきた。

「…………こちらも同じ感想です。想像以上の強さでした」

少し躊躇し、しかししっかりと握手を返す。

……他人との一次的接触は苦手だな。

「さて、それじゃ購買にでも行きましょうか」

「何か買うんですか？」

「私たちの夕飯よ。新入生歓迎会はとっくに始まってるだろうし、無理に引き留めたお詫びも兼ねて私が奢るわ」

デュエル中の態度やさっきの握手から分かっていたが、どうやら明日香さんは他の人が僕に抱くような妬みや嫌悪がないらしい。

デュエルに勝って爽やかな気分で終われたのは、はたしていつ以来だったのだろうか。

「ありがとうございます。ゴチになります」

「じゃあ行きましょ」

僕らは連れ立って購買に向かった。

「……………」

「……………」

終了間際の購買にすべり込み、なんとか食料を手に入れられた。

「すごく、ドローパンです」

「……………ごめんなさい」

目の前に積まれた、一人では持ちきれないドローパンの山。

トメさんが「どうせ売れ残りだから持ってっちゃって」とのことで、残りのドローパン全てをタダで譲ってくれた。

さすがにドローパンだけでは味気ないので他のものも買おうとしたのだが、食品系はもう残っていなかった。

「幸い飲み物は買えましたし大丈夫ですよ。春のドローパン祭りですね」

落ち込んでいる明日香さんが少しでも気にしなくてもいいように、意識して明るく茶化す。

「……………ありがとうございます。よしっ、食べましょー！」

「はい、いただきます」

そこからは中身がランダムなドローパンを思い思いに食べていった。

ジャムやクリームなどオーソドックスなものから、おにぎりやギョーザといった変わり種まで様々だ。

「あっ、これー！」

「どうしました?」

「以前から食べたいと思ってた黄金のタマゴパンだったの!」

なんでもこの黄金のタマゴパンは1日に作られる数が限定されていて、当たった者はすなわちドロー^{りよく}力がある、かも? とのことだ。

それにしても、

「~~~~~♪」

姉御肌な感じかと思えば、食べたかったパンの中身でここまで機嫌良くなる子供っぽさもあって可愛らしいひとだな、と微笑ましくなった。

「ん?」

そろそろお腹いっぱいになってきたな、という頃。

ドローパーンを小さくちぎりながら食べていると、その中身はカードだった。

汚れたりしないようビニール包装されているそれを引っ張り出し、何のカードか確認する。

《荒野の女戦士》

戦闘破壊されるとデッキから特定の条件に合うモンスターを特殊召喚する、といった効果を持つ通称『リクルーター』と呼ばれる類いのカード。

このカードの場合は『攻撃力1500以下の地属性』という条件だ。使いやすいようにご丁寧に3枚セットで入っている。

「明日香さん、これ良かったら使ってください」

「これって、ドローパーンから出たカード!? これもかなり低確率のはずよ。……あなたのパンに入ってたのだから、あなたが使うべきよ」
「残念ながら僕のデッキとは噛み合わない効果なので、明日香さんが使ってあげてください。その方がこのカードも喜ぶと思います」
言うてから気づいた。

カードの精霊が見えるから『カードが喜ぶ』と表現してしまったが、普通の人からすればおかしな言い方だ。

変な人に思われたかなと冷や冷やしていると、

「このカードも喜ぶ……それ、良いわね」

明日香さんは妙に納得した表情でその表現を肯定した。

「私が持っているカードで友人のデッキと相性の良いカードがあっても、何て言ってあげればいいのか思いつかなかったの。普通にあげようとしても『恐れ多い』とか言われて受け取ってもらえなかったから、今度からそう言うて渡してみるわ」

だから、と明日香さんは続ける。

「そのカードはありがたく頂くわ。その代わり、あなたのデッキと相性の良いカードがあったらちゃんを受け取ってもらおうよ？ 響也くん♪」

今日見た中で一番の笑顔を向けて、明日香さんは僕を名前で呼んだ。

「それじゃ、おやすみなさい」

ドローパンを食べ終わり、遅くならないうちに解散することにした。

イエロー寮に戻っていく彼の背中を少しの間眺めてから、私も女子寮へと歩き出した。

校舎から各寮までの道は明かりのない場所もあつて少し不安になるが、先ほど彼にもらったカード——《荒野の女戦士》をポケット越しに触れると、その不安も和らいだ。

「あら、明日香じゃない」

女子寮の明かりが見えてきて人工の光源に安心していると、不意に名前を呼ばれた。

その声の主を見ると、長い髪をツインテールにした特徴的な髪型の女生徒がいた。

「雪乃、こんな所でどうしたの？」

藤原雪乃。

気分屋で本気を出すことは稀だけど、その実力はかなりのものである同級生。中等部からの友人のひとりだ。

「それはこちらのセリフなのだけれど。ちなみに私は夜風に当たりに来ただけよ」

「私は……野良デュエルの帰り、といったところかしら」

「へえ、その様子だと勝ったのかしら？」

「いいえ、相手のライフを少しも削れず完敗だったわ」

「ふうん、相手の殿方を大層気に入ったようね」

「なっ!？」

なんで相手が男子で気に入ったって分かるの!？」

「なんで分かったのか、って顔ね。まず相手が女子なら一緒に戻って来るでしょう。そして負けたのにスッキリした笑顔で、でも瞳の奥に闘志を燃やしていれば誰でもそう思うわよ」

くう、その通りだから何も言えない。

「そんなに凄いわやがいるなら紹介してくれないかしら」

「それは……。ええ、分かったわ。機会があれば」

数秒迷う。

雪乃と響也を会わせても別に問題ないはずなのに、なぜか逡巡してしまった。

「——ふふっ、どうやら本当にアタリみたいね。楽しみにしてるわ。……どうせならあの人たちにも紹介しようかしら」

「それは貴方に任せるわ」

「あら、私より明日香の方があの人たちと親しいと思ったのだけれど」

「それはそうなんだけど——」

「ああー!!」

返事の途中で女子寮の方から大声が聞こえて言葉が遮られる。

「明日香ちゃんっ！ 歓迎会にいなかったから心配したんだよ!!」

「……心配をかけてすみません、なのは先輩」

私怒ってます、と全身で表現する様に腕組みしているけど、可愛らしすぎて全然威圧されない。

明るい茶髪を雪乃よりもサイド寄りのツインテールにしていて、強い意志を感じる瞳の1学年上の先輩。高町なのはさんだ。

「なのは、アスカが困ってるよ。でも何事もなくてよかった。鮎川先生が心配してたから後で行った方がいいよ、アスカ」

「はい。ありがとうございます、フェイト先輩」

なのは先輩を窺^{たしな}めるのは、綺麗な長い金髪を背中に流している優し

そんな雰囲気、同じく1つ上の先輩。フェイト・テスタロッサさん。「では私は鮎川先生の所へ向かうので失礼します」

「ありや、行っちゃった。……私、明日香ちゃんに避けられてる気がするんだけど」

「そ、そんなことないよ。うん、ほんのちよつと他人行儀なだけだよ」

「それはこの場合同じ意味合いよ、フェイト先輩。明日香はなのは先輩のことを意識しちゃってるだけなの。ライバルとして、強者として、格上として、ね」

「それは嬉しいんだけど、普段はもつと仲良くしたいなあ…」

「そういえば、ユキノたちは何を話していたの？」

「ああ、明日香が完敗したのに満足そうにしていたからそのお相手を紹介してもらおうとしてたのよ」

「その話、詳しく」

「……強さに貪欲なのは他人の^{明日香}こと言えないわね、先輩方」